平成 16 年 4 月の解説

【4月の週間天気予報から】――短い周期の天気変化――

4 月は天気が周期的に変わり、移動性高気圧による晴れと低気圧による悪天が交互に現れることが多いのですが、今年の東京は、2 日は日本海低気圧が通過し、4 日は南岸低気圧が通過し、8 日は寒冷前線が通過して、一週間に 3 回も雨が降りました。2 日の雨については 3 日前から予報していますが、4 日の雨を予報したのは前々日と前日でした。8 日についても、雨を予報したのは 4 日前と前日だけです。高気圧や低気圧、前線の移動が速く、短い周期で天気が変わるときには、低気圧や前線の動きを何日も前から正確に予測することが難しいのです。

2 日については、4 日前から 7 日前の予報では当日の雨が予報できていませんが、次の日の 3 日を雨か降水確率 40%の曇りと予報しており、3 日予想の雨が 1 日早まっています。4 日と 8 日についてもほぼ同様です。天気の変化が早い時期は降水が 1 日早まることもあるため、週間天気予報では、雨予報以外でも降水確率の高い日には注目していただきたいと思います。

【4 月の天候状況及び検証結果】

低気圧が日本海や沿海州を通過した事例が多く、本州の南岸を通る低気圧が上旬と下旬に各 1 回と少なかったのが、今年の 4 月の特徴です。中旬までは周期的な移動性高気圧に覆われて全国的に晴れる日が多く、東・西日本を中心に日照時間がかなり多くなりました。下旬は、低気圧が急激に発達しながら短い周期で日本海を通過したため、全国的に荒れた天気となる日があり、低気圧が通過した後は強い寒気の影響で北日本では雪も降りました。

このような天候状況の中で、予報期間平均の「降水の有無」の適中率は、全国平均で 76%でした。地域的に見ると、北海道で例年並にとどまった以外は、ほぼ全国的に例年より高い適中率で、特に沖縄地方は 18 ポイント、関東地方は 14 ポイントも例年を上回っています。

4 月の全般的な気温の状況は、ほぼ全国的に平年の気温より高くなりました。下旬は、日本海低気圧に向かって吹く強い南風と通過後に流入した寒気の影響で、全国的に寒暖の変動の大きい時期もありましたが、東・西日本の月平均気温は平年より 1℃以上も高くなりました。

最高気温の予報誤差が東・西日本で例年よりやや大きいところもありますが、全国の予報期間平均では最高気温(3.0℃)・最低気温(2.3℃)ともほぼ例年並の予報誤差でした。

【6 月の天候の特徴】

季節が春から夏に移る間に現れる雨の多い期間が「梅雨」です。大陸から移動してくる高気圧やオホーツク海の高気圧と南の太平洋高気圧の間に梅雨前線が形成され、これらの高気圧の異なる性質を反映して日本列島の南と北の天候に大きな差が現れます。オホーツク海高気圧から吹き出す冷たい北東の風は、北日本から東日本の太平洋側の地方に「梅雨寒」をもたらし、長期間続く場合には、低温や日照不足によって農作物の生育不良などの冷害を引き起こす「やませ」となります。逆に、前線の南側から高温・多湿な空気が流れ込むような場合には、西日本などで梅雨前線の活動が活発となり、１時間に 30mm 以上の激しい雨による土砂災害や洪水などの災害が発生することもあります。

なお、6 月における週間天気予報の「降水の有無」の適中率（3 日目～7 日目平均）は、全国の平均（1992 年～2003 年）で 62%です。

【週間天気予報の利用に際して】

数値予報モデルの改良や予測手法の改善を続けて、予報精度の向上を目指していますが、予報期間後半の予報ほど精度が落ちます。週間天気予報を利用される場合には、発表時に付加している信頼度を参考にしていただくとともに、できるだけ新しい予報をご利用ください。